

磯根漁場の包括的管理による生産性向上研究

(予算区分 研究費 研究期間 2017～2019 年度)

担当：水産技術研究所伊豆分場 長谷川雅俊

【研究の背景とねらい】

- 伊豆地域では磯根漁業が長年継続されてきましたが、漁獲量や漁業従事者の減少、磯焼け、テングサ漁場の荒廃などの自然環境の変化に伴い、新しい磯根漁業の構築が求められています。
- 本研究では、新しい磯根漁業の構築に向け、荒廃したテングサ漁場の回復手段として雑藻刈りを改良すること、アワビ資源の再生産効率を高める手法を確立すること、テングサ・アワビ漁場の配置と利用方法を検討することにより、個々の漁場の生産性向上、漁場の適正配置による包括的な地先海面の生産性向上を目標としました。

【研究成果】

- テングサ漁場の生産性向上：テングサ漁場の雑藻刈り手法の改良のため下田市白浜地区で、雑藻刈りに母藻投入、母藻移殖、食害防除を組合せた試験を行ったところ、雑藻刈り単独区より組合わせ区で効果が高くなりました。当区では素潜りによる操業が行われ、年当たりテングサ約 300kg/800 m²が漁獲され、地区の総漁獲量の 20% を占め（図 1）、漁獲効果まで確認されました。
- アワビの再生産効率向上：メガイアワビ母貝を天然漁場の棚や溝に移殖し、実験的に親貝密度を 1.5～4 倍に高めた結果、新規加入量は過去 8 年間では中位の上となりました。
- 漁場のゾーニングの試行：テングサ生長、漁場と操業の面積割合（操業率）、漁獲率を要因とした白浜地区の潜水漁業のテングサ操業モデルを開発し、実際の漁獲状況を再現しました（図 2）。当地区の現漁業勢力ではテングサ漁場、アワビ漁場の配置と利用は現状で十分ですが、今後のテングサ操業隻数の増加時にはテングサ漁場の拡大が必要であることがわかりました。

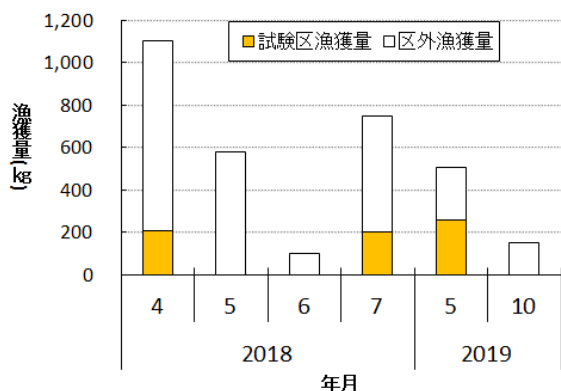


図 1 白浜素潜り漁業者のテングサ漁獲状況
総漁獲量の 20% を試験区からの漁獲が占めた。

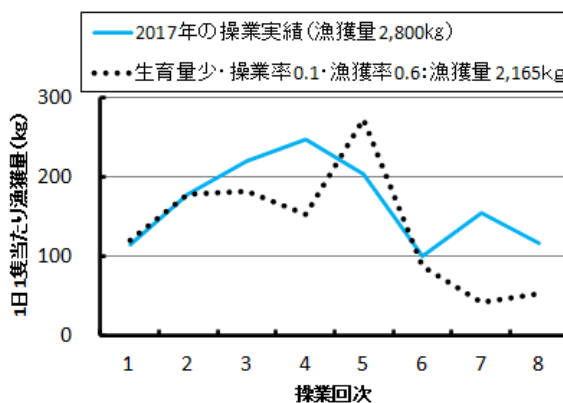


図 2 テングサ操業モデルによる操業の再現

【研究成果の普及方法】

- テングサ漁場の生産性向上の成果（雑藻刈り+母藻投入）については、すでに伊豆地区の数箇所まで実施され、普及は進んでいます。
- 世界的なテングサ需要の高まりに加え、黒潮大蛇行によるテングサ藻場衰退からテングサ生産増大の要望が強く、全県漁獲量 100 トンレベルの回復のために、テングサ漁場の生産性向上技術の普及を目的とした研修会を実施します。
- テングサ操業モデルを利用した各地区の漁場診断を行い、漁場の適正配置を指導し、地区としての包括的な生産性の向上を目指します。（作成 2020 年 3 月）